

## 都・建設予定地 生活記 (9)

あまり良く知られていないインドの西・グジャラート州で生活しながら、なんとかこの片田舎を都にしてみようと足掻く僕の生活記。

---

日本人のナマモノに対する欲求は凄まじい。魚を刺身で食い、卵を生でご飯の上に落とし、なんなら肉だって生でいく。新鮮なまま、安全な経路で輸送されたという認識があるからこそ、当たり前になることだ。インドではちょっと勇気がいる。ちょっと、と言うか、蠅が飛び交うようなところに、日がな一日でん、と置かれている魚を買ってきて生で食べるのは、勇気云々の話ではない。だが、ナマモノへの欲求はくすぶり続ける。

ベジ州、グジャラート。ナマモノから最も遠い場所のひとつである。

「漁村で新鮮な魚を仕入れに行きませんか」

そう誘ってきたのは、アーメダバードでインターンをしている大野君である。そして「港で新鮮な魚を買ってくれば、生でもいけるのでは」と提案したのは、農村まで一人で先住民の絵画を見に行くインドレベルを誇る飯田さんであつたらしい。

なるほど、アーメダバードやガンディーナガルは内陸で、おまけに魚など見ることもないのでつい忘れてしまうのだが、グジャラート州には海がある。地図をよくよく改めれば、南と西はほぼアラビア海に面しているのである。その地の利を活かして、魚を自分たちの手でアーメダバードまで運んできてはどうかということである。その朝釣られた魚を、氷をたっぷり詰めた発泡スチロールか何かで梱包して持ってくれば、(氷さえ溶けなければ)少なくとも新鮮さは保証されるはずだ。聞けば、アーメダバードまで深夜バスで 8 時間程の距離だという。行ける、と思った。というより、食える、と思った。

かくして、僕は金曜日の夜、大野君とともに深夜バスに乗り込むことになった。A/C 付きのこのバスは少しだけ肌寒い。だが長袖とバスタオルくらいは持ってきていたし、何よりもフラットタイプの座席で、完全に横になれるのは長時間の道程にはありがたかった。

通路側のカーテンを閉めて、窓の外を眺める。見慣れた街の夜をバスが走る。じめじめとしてはいるが、雨はまだ降らない。そう言えば、傘を忘れてきた。雨が降らないといいのだが。いや、いっそ降ったほうが、氷は溶けないだろうか……。瞼の裏でつらつらと思っているうちに、いつの間にか、意識が飛んでいた。

バスは、朝八時に終点の港町ヴェラヴァルにたどり着いた。明け方に雨が降つたらしい、道はぬかるんで、水たまりは大きく、濁っている。風は凩いでいて、海の気配もない。

「海はどっちだろう」 大賑わいの野菜市場で道を確認、言われた方向に僕らは歩く。こんなところまでサンダルでやってきてしまったせいで、水たまりを越える時に泥がはねた。ふと、潮が香った。続く家々の裏側が急に空白になる。

海が見えた。灰色に、薄く覆う雲の下、アラビア海は荒れに荒れていた。

続く

---

プロフィール：滝口浩平

2010年から約1年間のデリー留学を経て、東京外大ヒンディー語専攻卒業。色々あって塾・予備校の市進に雇われ、また色々あってインド現地法人 Ichishin India Consultant.Pvt.Ltd 社員となる。更に色々あって日本語教師として Pandit Denndayal Petroleum University (PDP) で教鞭をとる。第29回織田作之助青春賞受賞。